



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

試行錯誤を通して新しい価値に出会う図画工作科の授業における児童の取り組みの実態と教師の視点について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-01-21 キーワード (Ja): キーワード (En): trial and error, image and form, arts and crafts, art education 作成者: 中村,翔太郎, 笠原,広一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173490

試行錯誤を通して新しい価値に出会う図画工作科の授業における 児童の取り組みの実態と教師の視点について

中村翔太郎*¹・笠原 広一*²

美術・書道講座（美術科教育学分野）

（2021年8月30日受理）

NAKAMURA, S. and KASAHARA, K.: Actual Conditions of Children's Efforts and Teachers' Viewpoints in an Arts and Crafts Class for Encountering New Values through Trial and Error. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Division of Arts and Sports Sciences., 73: 81-93. (2021) ISSN 2434-9399

Abstract

This paper is a study and discussion of an arts and crafts class conducted with three classes of sixth graders at elementary school, and revised the presentation at the research meeting of Fuchu City Elementary and Junior High School Education Study Group. Throughout the class, we tried to capture the children thinking and working on their own and examined what kind of trial and error they went through and what kind of value they found through their painting. We found that the children discovered the beauty of overlapping colors while painting, that their images expanded from the traces of paint they wiped off, and that they found the shapes they wanted to represent while interacting with their friends. In addition, it became clear that the children were discovering new values that they had not imagined as they proceeded with their work. To create a class in which students can think, "this is good!" and create trial and error, it is necessary to encourage them to first try to express their ideas in a form, and then to think together with them while observing their activities as they unfold. It was found that it is important for the teacher to not only aim to reach the goal, but also to accompany the students and to face the class with the perspective of restructuring the activities themselves

Keywords: trial and error, image and form, arts and crafts, art education

Department of Fine Arts and Calligraphy (Art Education), Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要 旨

本論は府中市立小中学校教育研究会図画工作・美術部（以下府教研図工部と表記）で実施した題材研究における授業の記録と考察である。6年生3クラスで実施し、児童が表したいもののイメージをもてるようにすることと、試行錯誤しながら描き進められることを重視し、授業を通してそれぞれの児童が自ら考えながら活動する姿を捉え、どのような試行錯誤がなされ、どのような価値を見出したのかを考察した。児童の姿としては、描いている最中に

* 1 府中市立府中第十小学校（183-0005 東京都府中市若松町4-29）

* 2 東京学芸大学 美術・書道講座 美術科教育学分野（184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1）

色の重なり的美しさを発見したり、拭き取った絵の具の跡からイメージが広がったり、友達と関わりながら自らの表したい形を見付けたりする様子を捉えることができた。そして、形に表していく過程の中で、児童自身が想像していなかった新たな価値を見出しながら製作を進めている実態が明らかになった。このような「これがいい!!」と児童が思える試行錯誤を生み出す授業づくりにおいては、まずは形に表してみることを促し、そこから繰り広げられていく児童の活動を見守りながら共に考えていくことが求められる。教師は目標への到達を目的とするだけでなく、児童と伴走し、活動自体をも組み替えていくような視点をもって授業に向き合うことが重要であることがわかった。

キーワード：試行錯誤、イメージと形、小学校図画工作科、美術教育

1. 本研究の目的

本論は、令和2(2020)年に府中市立小中学校教育研究会図画工作・美術部(以下府教研図工部と表記)で実施した題材研究における授業の記録と考察である。「これがいい!!」という言葉が表すように、児童が自分の感じ方に自信をもって表現する図画工作科の授業づくりに取り組み、6年生3クラスを対象として行った。本実践研究では、児童が自分の思いが形になった「これがいい!!」と思えるような表現活動がどのように展開したのかを素描し、自分の感じ方に自信をもって表現するようになるための授業のあり方について考察を行う。

2. 本実践の背景

本授業は、府教研図工部の題材研究にあたり、第一著者の中村が実践し提案したものである。府教研図工部では、部内の研究局の教員が中心となり研究主題を立て、主に若手教員が研究授業を行っている。令和2年度は、「感じる心つくる喜び豊かな子どもたち」という主題に、「『これがいい!!』児童が自分の感じ方に自信をもって表現する授業づくり」という副題が付され、研究授業を行う運びとなった。しかし、新型コロナウイルスの影響により、府中市の小学校では6月まで臨時休業期間が設けられた。学校再開後も制限がかけられ、本来であれば研究授業として行うはずだった本実践は、結果的には題材研究における授業提案という形で行われた。第二著者の笠原は同研究会で助言指導を担当している。

授業を考えていく上では、研究主題から二つの視点を得た。一つは、「これがいい!!」という言葉に表されているように、児童それぞれが主体的に活動し、自らの表したものに対して意味や価値を見出すことができるか、という視点である。実際、図工専科の教員間では「これがいい!!」に至らない児童に対しどのよ

うな手立てを考えていくかが議題となることも多い。それは材料の使い方を試したり工夫を重ねたりするでもなく、とりあえず物としての作品をつくり、終わりにしてしまう児童の姿である。そこに意味や価値を見出だしている様子はなかなか見受けられない。その姿とは対比的に「これがいい!!」と自己決定する児童には、表したもや自分自身への肯定感が感じられる。これは「造形的な見方・考え方」を働かせ、活動する姿でもある。「造形的な見方・考え方」とは「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」(MEXT, 2017, p. 11)であり、今回の改訂によって明確に示されたものである。つまり「これがいい!!」と意味や価値を創造できる力は予測困難な社会を生きていく上でも必要とされるものであり、図工の授業を通して育成すべき重要な力だといえる。

もう一つの視点は、以上の姿を実現するために、授業づくりとして何ができるかを考えるということである。活動の中で「これがいい!!」と自己決定するのはそれぞれの児童であり、そこに教師が強制的に介入する余地はない。しかし、児童にとっての「これがいい!!」を見出ださせるためには、題材をただ提示するのではなく、学習環境の整備や発問の仕方、児童の取り組みに合わせた手立て等、様々なアプローチが必要となってくる。

ここでさしあたり、以上の二つの視点を整理しよう。前者で示した、児童にとっての「これがいい!!」を重視していくことは、授業が展開する中で見えてくるそれぞれの児童の活動に教師がいかに対応していくかという点で、「児童を軸とした視点」である。後者の授業づくりとして何ができるかを重視していくことは、児童の実態を踏まえた上で授業としていかに計画を立て実践するか、という点で「授業を軸とした視点」だと言える。教師という立ち位置で考える上ではどちらがより重要ということではなく、どちらの視点も常に

成立させた状態で進めていかなければならない。これらを前提として具体的な授業の内容を組み立てていった。

授業は令和2（2020）年11月16日から12月18日の期間、府中市立府中第十小学校の6年生3クラスを対象に、各クラス8時間ずつを活動に当てて実施した。授業の内容は、花や植物をモチーフに、チョークと洗濯糊を混ぜ合わせた描画材を使い、校内の階段の壁面に表していくというものである。この表現方法自体は、本校の前任の図工専科教員や府中市内の他2校でも実践されているものを参考にしたが、授業の展開については今回独自のものである。授業を軸とした視点から考えた手立てについては以下指導案の題材設定の理由として記してある。

3. 本題材について

授業の詳細について指導案や実践の中での記録などを元に以下に示す。

3. 1 授業概要

日時：令和2（2020）年11月16日から12月18日
 場所：府中市立府中第十小学校 図工室・校内階段
 対象：第6学年3学級116名
 授業者：中村翔太郎
 題材名：「花に想いを」

学習指導要領との関連については以下のとおりである。

- ・絵に表す（絵や立体，工作に表す）
- ・A表現（1）イ（思考力，判断力，表現力等）
- ・A表現（2）イ（技能）
- ・B鑑賞（1）ア（思考力，判断力，表現力等）

〔共通事項〕

- ・（1）ア（知識）
 イ（思考力，判断力，表現力等）

3. 2 題材の目標

本題材の目標の詳細は以下となる。

（1）知識及び技能

- ・自分の想いを花に込め，身体を使いながら絵に表すときの感覚や行為を通して，動き，奥行き，バランス，色の鮮やかさを理解する。
- ・表現方法に応じて自作の絵の具（チョーク粉末と洗濯糊）を活用するとともに，前学年までの描画材についての経験や技能を総合的に生かしたり，表現に適した方法などを組み合わせたりするなどして，表

したいことに合わせて表し方を工夫して表す。

（2）思考力，判断力，表現力等

- ・想いを込めながら花を描く中で感じたこと，想像したことから，表したいことをさらに見付け，形や色，材料の特徴，構成の美しさなどの感じを考えながら，どのように主題を表すかについて考える。
- ・自分たちの作品の造形的なよさや美しさ，表現の意図や特徴，表し方の変化などについて，感じ取ったり考えたりし，自分の見方や感じ方を深める。
- ・動き，奥行き，バランス，色の鮮やかさなどの造形的な特徴を基に，自分のイメージをもつ。

（3）学びに向かう力，人間性等

- ・主体的に自分の想いを花に込め，身体を使いながら絵に表す活動に取り組み，つくりだす喜びを味わうとともに，形や色などに関わり楽しく豊かな生活を創造しようとする。

3. 3 題材の評価規準

題材の評価基準は以下のとおりである（表1）。

表1 題材の評価基準

<p>（知識・技能）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の想いを花に込め，身体を使いながら絵に表すときの感覚や行為を通して，動き，奥行き，バランス，色の鮮やかさを理解している。 ・表現方法に応じて自作の絵の具（チョーク粉末と洗濯糊）を活用するとともに，前学年までの描画材についての経験や技能を総合的に生かしたり，表現に適した方法などを組み合わせたりするなどして，表したいことに合わせて表し方を工夫して表している。
<p>（思考・判断・表現）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・動き，奥行き，バランス，色の鮮やかさを基に，自分のイメージをもち，想いを込めながら花を描く中で感じたこと，想像したことから，表したいことをさらに見付け，形や色，材料の特徴，構成の美しさなどの感じを考えながら，どのように主題を表すかについて考えている。 ・動き，奥行き，バランス，色の鮮やかさを基に，自分のイメージをもちながら，自分たちの作品の造形的なよさや美しさ，表現の意図や特徴，表し方の変化などについて，感じ取ったり考えたりし，自分の見方や感じ方を深めている。
<p>（主体的に学習に取り組む態度）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・つくりだす喜びを味わい，主体的に自分の想いを花に込め，身体を使いながら絵に表す学習活動に取り組もうとしている。

3. 4 題材設定の理由：題材観

本題材は，花や植物をモチーフに，校内の壁面に描き表していく活動として展開する。題材として重視していきたい点が次の二点となる。

- ①表したいもののイメージをもてるようにする
- ②試行錯誤しながら描き進められる

①は児童が自ら活動に取り組んでいく上での原動力となるものであり、②は児童にとっての「これがいい!!」に至るまでの過程において必要な要素だと考える。

活動の具体的な流れとしては、どのような想いを込めて花や植物を描くかをイメージすることから始める。花や植物には花言葉をはじめ、様々な意味やメッセージが込められることが多い。①への手立てとしては、そのような例や場面を児童に挙げてもらい、全体で共有していく。その上で自分がどんな想いを表したいのか、その想いに合った花や植物の色・形のイメージを広げていくようにする。

壁面に描き始める際には、描画材について意識させていくことが②に関連すると考える。まず、絵の具が挙げられる。これまでは机の上に置かれた紙等が支持体となるが多かったが、壁面の場合はそれが直立している状態であるため、絵の具の水分量によっては当然垂れてしまう。調節の難しい様子の児童には助言をしつつ、これまでの経験を生かせるように見守りながら進めていく。また、粉にしたチョークは混ぜ合わせることで自分だけの色を作ることができ、こだわりをもって取り組めるポイントである。さらに、壁に描いたものは雑巾で拭き消すことができる。普段失敗を恐れて描き進められない児童にとっての不安感解消につながることも、その特徴を生かした描画方法が出てくることも考えられる。表したいもののイメージをかたちに表すだけでなく、試行錯誤しながら活動することで、はじめにイメージしていたものを超える新たなイメージに出会う。そのイメージの更新こそが「これがいい!!」につながるのではないかと考える。

3. 5 題材設定の理由：児童観

本学年の児童は、毎時間の図画工作の活動を楽しみにしており、概ね意欲的に取り組んでいる。本学年は昨年度から担当しているが、材料や用具などへの関心が高く、身体を使って関わることで主体的に取り組む姿につながっていく傾向にある。昨年度に実施した「消してかく」では身体を大きく使いながらコンテや消しゴムを扱い、夢中になって描く姿が見られた。また、今年度の「使って楽しい焼き物」では、粘土の感触や焼成による変化を味わう様子が印象として強かった。そのため、本題材においても大きく身体を使いながらのびのびと表すことを通してねらいに向かわせていく。

課題としては、イメージすることに苦手意識をもっていたり、その日の気分によって集中力が持続しなかったりする児童の姿が見られることである。具体的な活動の見通しをもてるように流れを板書し、丁寧な声かけを行いながら活動に参加させていく。

3. 6 題材設定の理由：指導観

指導にあたっては「ただ楽しんで描いて終わり」とならないようにしたい。本題材は、活動の流れとしては自らの表したい「想い」が起点である。しかし、この「想い」の部分が不在の場合、壁に描いて楽しいだけの活動で終わってしまう可能性がある。身体を使いのびのびと描きつつも、そこに表れた「花や植物」を読み取ることで「想い」を見出だしていけるよう、個別に声かけをしつつ取り組ませていきたい。

また、どのような想いを込めて描いているのかを聞いたり、色や形の工夫した点を話してもらったりすることで、表している児童本人が自らのイメージを意識化できるようにしていく。

学習環境の工夫としては、描く壁面を学級ごとに配分し、黄色階段1～4階を1組、水色階段1～4階を2組、緑階段1～4階を3組とする。学級ごとには描く場所の指定を行うが、児童一人一人の範囲を明確に定めることはしない。身体を大きく使いながら描いたり、用具を工夫して表したり、周囲で描く友達の絵との関係が生まれたりすることを予想しつつ、主体的に描き進める活動そのものの広がりを用意しておく。

材料・用具の工夫としては、洗濯糊と水をあらかじめ混ぜ合わせておきボトルに準備しておく。チョークは小さく使いにくくなったものを各学級から回収しておくとともに、十分な量を準備しておく、色を選べるように並べて置く。基本的には絵筆を使用するが、児童の表したいイメージによってはローラーや手、ステンシルの型紙として使用できる厚紙なども用意しておく。

3. 7 材料・用具

材料や用具は以下のとおりである。

児童：筆、雑巾

教師：筆、雑巾、チョーク（白・赤・黄・青・緑・茶）、洗濯糊、ドレッシングボトル、金網、透明カップ、トレー、ラップフィルム、ローラー、厚紙

3. 8 活動の流れ（全8時間）

指導計画は以下のとおりである（表2）。

表2 指導計画

	児童の活動	教師の支援
1・2時間目	<ul style="list-style-type: none"> ・活動の流れを確認する ・アイデアスケッチをする ・描く場所を決める 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動の流れと確認事項を伝える（作品例を示す） ・アイデアスケッチが描けない児童への個別の声かけ ・描く場所の調整
3・4時間目	<ul style="list-style-type: none"> ・チョークと洗濯糊で絵の具をつくる（一斉） ・壁面に描く 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵の具の作り方の説明 ・個別の指導、支援
5・6時間目	<ul style="list-style-type: none"> ・チョークと洗濯糊で絵の具をつくる（適宜） ・壁面に描く 	<ul style="list-style-type: none"> ・個別の指導、支援
7・8時間目	<ul style="list-style-type: none"> ・チョークと洗濯糊で絵の具をつくる（適宜） ・壁面に描く ・振り返りを行う 	<ul style="list-style-type: none"> ・個別の指導、支援 ・振り返りを促す言葉かけ

3. 9 活動全体の記録と教師の思考

1・2時間目は、活動の流れの確認と、アイデアスケッチを描くこと、描く場所を決めることを行った。導入では教師による問いかけから入った。「花というものを日常のどのような時に目にするか」という問いに、児童からは、花壇、通学路、花屋、家、卒業式、入学式、結婚式、お葬式、お墓などといった、花を見かける場所や場面が挙がった。ここで「花に想いを」という題材名を示すと、勘の良い児童はこの時点で「花」と「想い」が結びつき、理解したような表情をしていた。続けて、花壇に花を植えたり、家に花を飾ったり、誰かに花を贈ったりするとき、人は何かしらの気持ちや感情を花に込めているのではないか、という話を全体で共有した後、題材の概要と流れの説明を行った。それぞれの想いをもとに花として表していくという内容自体は、児童にとっても分かりやすいものだったようである。とはいえ、それだけでは活動に取りかかれぬ児童を想定し、参考となるような画像を十数点、電子黒板に映して見せることにした。作例を見せた場合、当然その内容に引っ張られてしまう児童が出るのではないかと想定したが、造形的なイメージを広げるためにも必要と考え示すことにした。様々な花や葉の写真や、植物をデフォルメしたイラストやデザイン、アーティストの浅井裕介の壁画作品などを幅広く用意し、必要に応じて見ることができるよう設置した(図1)。その結果、どのクラスでも考える際の参考にしてしている様子が見られた。



図1 電子黒板で画像を見ながら考える児童

アイデアスケッチを描いていく際には、何を表すかで悩む児童も多く見られた。花の形を描くことはできるが、どのような想いから広げていくかを考えこんでいる(図2)。指導観でも記したが、こうした姿はある程度想定していた。むしろ表したいものを思い描き、ただ楽しくアウトプットするだけの活動にならないようにする必要がある。「想い」から進まない児童に対しては、一度手を動かして様々な「花」を描いてみるように声かけを行い、試す中で「想い」について考えていくように伝えていった。



図2 図工ノートにアイデアスケッチを描く

ある程度活動が進んでくると、集中力が続かなかったり、友達の様子が気になり始めたりする児童も出てくる。全体の進み具合を見つ、実際に描く場所を確かめに行くことにした。1組が黄色階段、2組が水色階段、3組が緑階段というように、クラスごとに固まって取り組むようにし、繋がりのある空間で描き進めることで、児童がお互いの描く絵を見合ったり、その様子から学び合うことが出てくることを期待した。どのクラスでも、それぞれどの場所で描くかは自分たちで決めさせることにした。使いたい場所の前に立つように指示を出し、様子を見てみると、2、3人の友達同士で固まって描きたい児童と、1人で広い壁面を使いたい児童とに大きく分かれて場所を選び始めた。児童の1人は、実際の壁面を前にして縦に大きいものを描こうと思ったらしく、高い場所はどのように描けば

よいかと質問をしてきた。こちらとしては各階の特別教室の机を台として使えば良いと考えていたのだが、階段の途中に関しては使用できないことに気付いた。そのため、他にも高さのある絵を描こうと考えている児童がいるか声をかけ、場所を多少調整することとなった。壁面に表すことばかりに注目していたため、足場の問題を想定できていなかったが、児童の発言によって調整できた。だが、高い場所に描けないからこそ生まれる活動の可能性を潰してしまったとも言える。児童自身が試行錯誤する余地をどこまで残すのかは常に課題で、教師の立場として設定するその範囲については、授業の最中において絶えず探っていかなければならない。

3時間目以降は専用の描画材（チョーク絵の具）の作り方を示した後、各自のペースで描き進めていった。チョーク絵の具とは、チョークを金網で粉末状にし、洗濯糊と水を加えたものである。チョークは赤、青、黄、緑、白を基本色とし、紫、茶、蛍光オレンジも用意した。児童はチョークを粉末状にするという普段できないことを楽しみながら少しずつ他の色を加えるなどして自分だけの色を調合していた。試しながら色の組合せを考えている児童も出てきた（図3）。



図3 チョークの粉末を重ねながら色合いを楽しむ

3時間目の色づくりでは、どうしても色を混ぜすぎてしまい、濁った色が出来上がる様子がやや見られた。しかし、こうした児童も回数を重ねるうちに、自分の好みの色をつくり出せるようになっていった。洗濯糊と水については、あらかじめ調合したものを、ドレッシングボトルに入れて各グループ机に配布した。色の調合同様に、実際に試しながらちょうど描きやすい濃さを探ることができていた（図4）。活動が進むにつれて、あえて水を多めにすることで壁に飛ばしたり、水を少なめにして濃い色で表したりと工夫しはじめる児童も見られた。



図4 水の量を調節しながら描きやすい濃さを探す

3時間目後半からの描き始めは、大半の児童が恐る恐るといった様子だった。どんどん壁に描いていきたい気持ちはあるが、壁のどの場所から描き始めるか、どの程度の大きさで表すか、などと頭で考えているようでもあった。これまで授業で扱ってきた題材では、勢いに任せて描き切ってしまう児童が一定数いたが、本題材では描き始める前に一度立ち止まって考えているのが印象的であった。壁面の広さと、常に人の目に触れるということが要因とも思える。雑巾を使えば消すこともできるということを再度声かけしながらも、それぞれの児童のペースで取り組ませる。友達の様子を窺いつつも、筆を使って少しずつ線を描き始める。あまり目立たないようにと床近くから描く児童や、アイデアスケッチをしたノートを片手に慎重に線を描く児童も見られた（図5）。



図5 床に寝そべり目立たない場所から描く

中には壁を存分に使い、勢いよく描く児童もいた。しかし、勢いそのまま進めていくのではなく、少し離れて全体像を確認する行為が見られた（図6）。筆を走らせては全体を確認し、再度筆を走らせたり、部分的に消したりして表している。

本実践では「これがいい!!」と児童一人一人が自信をもって活動できる授業づくりを目指しているわけだが、児童の活動において重要なのは、イメージをもつことと試行錯誤しながら表すことだと考える。表す過程で全体像を確認したり、描いたり消したりしながら

表す行為というのは、まさにそのような状態だと言える。イメージすることと形に表すことを往來する中で「これがいい!!」を見つけ出していくのである。それを授業づくりの面から捉えたときに、教師の働きかけとしての眼差しが「授業を軸とした視点」である。そして、児童の試行錯誤を中心とした、その瞬間瞬間で立ち上がってくる事象への眼差しが「児童を軸とした視点」なのである。



図6 描いた形を離れた場所から確認する

3. 10 個々の児童の活動に着目して

5～8時間目は、児童がそれぞれで活動を進めていった。教師としては、材料や用具の扱いについての最低限の指導と助言をし、安全に活動できるよう支援を行った。以下では、活動の中で試行錯誤を重ねたり友達と関わったりする児童の姿に着目していく。

3. 10. 1 児童の姿1 (変化していく絵)

本題材では「想い」をもとに「花」をイメージし、形に表していくという流れで活動を進めた。しかし、その過程においては必ずしも初めに抱いたイメージがそのまま残るわけではない。材料、用具、場所、他者との関わりなどによって、表される形にも影響が与えられ、その形を通してイメージは常に更新されていく。

例えば、今回使用したチョーク絵の具は水の量によっては垂れてしまったり、薄くなりすぎてしまったりもする。この児童は、はじめは桃色の花びらを描いていたが途中で形がやや歪んでしまった。それを何とかしようと、ひと回り大きな水色の花びらを描き加えた。すると、まだ乾いていない線が重なり、混ざり合った色の線となった。色が混ざり合うことから、明るく賑やかな感じを表せるのではないかと発想し、他の色の線も重ねながら花びらを増やしていった(図7)。

同じように色の重なり注目し、筆で叩くように描くことを思い付いた児童も見られた。この児童は、以前取り組んだ絵の題材で点描の表現方法を試しており、本題材にもふと思い出して応用してみたようだった(図8)。

た(図8)。

これらの児童は、材料や用具を使って描く中で、偶然生じたことやふと試してみたことを価値のあるものと認識し、新たな視点を得て形にしていった例である。イメージが変化していくことを自然と受け入れながら活動することができていた。

図9の児童は、平和な世界という「想い」で表そうとしていた。最初はもくもくした形で描き始めた。だがイメージと違ったのか、全て消し、新たに線を描いていった。この時、きれいに消しきれていなかったのか、背景が水色がかかったままであった(図10)。



図7 混ざり合う色を生かして花を描く



図8 点描で花を表し始める



図9 もくもくした形



図10 水色がかかった背景

しかし、描き進める中で本人も気になっらしく、水色がかかった部分のみを少しずつ丁寧に消していった。そして新たに描いた線の周りのみ残すと柔らかな感じが表現できた(図11中央部の線)。拭き取った雑巾を筆の代わりに使いながら周囲にも柔らかな感じを丸い形で描き加えていった。さらに桃色の葉を描いて

いく (図12)。同じ桃色で大きな花も描いている (図13)。周囲に描いていた柔らかな丸にはっきりした水色を重ねていく (図14)。



図11 柔らかな感じ



図12 桃色の葉を描く



図13・14 花が変化していく一連の様子



活動の姿を見ていると、常にイメージを書き替えながら形に表していく様子がよく分かる。本人に聞いたところ、平和な世界という「想い」は一貫して変わらなかったが、「花 (植物)」の形は描きながら考えていったという。消し切れなかった絵の具の跡を単なる汚れや不要なものとして切り捨てるのではなく、柔らかさを表すために適した価値を持ったものとして見出だしていた。それはテーマを一貫して持ち続けていたからこそその発見だったとも言える。核となる部分があるからこそそれを手がかりに試行錯誤を行えたとも言える。

3. 10. 2 児童の姿2 (広がっていく絵)

一つの花を描いたり消したりを繰り返しながら意味や価値を見つけるのではなく、絵を広げたり繋げていくことで意味や価値を見出だしていく児童の姿もあった。この児童は身体を大きく使いながらうねった線を描き、そこに隙間なく葉を描いていった。最初は黄色一色で描いていたのだが、物足りなく思えたらしく、次は水色、その次は桃色といったように、同様の描き方で隙間を縫うように表していった。描く範囲はどんどんと大きくなっていき、色の違いや重なりによって生い茂っているような表現ができた。本人は表した形から、絡まり合った複雑な気持ちという「想い」を見出だしていた (図15)。



図15 壁一面に広がった複雑な形

この児童は、ひとまず大きな花を描こうと考え、根、茎、葉、花と、下から描いていった。机を台にすることで、高い場所まで描くことができた。もともとは鏡の右側に一つだけ表すつもりだったが、鏡の左側にも対になるような花を描き、最後にその二つをリボンで繋いだ。リボンを描き加えた理由を訊くと、「独りじゃないんだよという感じを表したかった」と話してくれた。間に位置する蛍光灯や鏡など、この場所だからこそその影響もあったのかもしれない。また、しっかりと根を張り堂々と花を咲かせている様子を描いているからこそ、リボンの繋がりが印象的である。この児童は花を表す中で、自分自身を強く投影していたようにも感じ取れた (図16)。



図16 二つの花をリボンの絵で繋ぐ

3. 10. 3 児童の姿3 (友達と交流していく絵)

児童の中には友達と共に描き進める様子も見られた。最上階の壁面を選んだ3人は横並びの位置でそれぞれ別々の花を描いていた。近くで活動していることもあり、お互いの描き方を共有したり、アドバイスをしあったりしていた。時間が進むにつれて3つの植物の境界は曖昧なものとなり、友達の植物に描き加えている姿も見られた。最終的には混ざり合った形で完成となった (図17)。



図17 3人の絵が混ざり合っていく

この2人もはじめは別々に活動をしていた(図18)。だが、絵の具を共有したりどんな花を描くかを考えたりしているうちに協力して一つの大きな木を描くことにしたようだ。太い幹を茶色で塗りつぶすことと、木の葉に当たる部分を色とりどりの丸で描くことを分業して進めていた(図19)。面白いことに、協力して描き切った後は、再び別々に描き始める様子が見られた。2人で協力して描く中でそれぞれが自分の表したい内容を見つけられたのだと考えられる。



図18 初めは別々に描く



図19 途中協力して描く

6年2組では、全員に手形を押してもらい、虹をイメージして表した児童がいた。この児童は、花を描く中で手形を付ける方法を思い付いたのだが、その方法を個人の活動に利用するのではなく、それによって全員で一つの作品が表せるのではないかと考えた。結果として花ではなくなってしまったが、クラス全員で取り組もうという発想に繋がったのはこの児童だけだった(図20)。



図20 クラス全員の手形で表した虹

以上のような児童の姿から読み取れるのは、同じ空間で活動することが、お互いに影響を与え合うということである。そして、その影響によって生じる変化というのは、自分一人の創作では出会うことのできない意味を含んでいる。特に本題材は壁面への描画であるため、全員が描いていく過程を見ることができる。また、授業外の時間も常に描き途中の絵が晒されているので、移動教室や登下校時の際に必ず目にする事となる。実際、通りがかる度にどのように描き進めていくかを考えていたという児童もいた。授業者が本題材を通して感じたのは、表すだけでなく見ることの重要性でもある。自らが表す「形」と「イメージ」の行き来だけでなく、他者の表した「形」や「イメージ」がすぐ近くに存在することで、時にはそれらが交差したり混ざり合ったりするのではないだろうか。交流しつつ表す活動は、自分一人では行き着くことのできない場所に連れていってくれる。

4. 協議会について

本実践の協議会は、令和2(2020)年12月9日に府中市立府中第十小学校で行われた。児童が実際に活動する姿を公開することはできなかったが、製作途中の壁面を見てまわったり、活動の様子を記録写真から読み取ったりしながら協議が進められた。

各校の教員はA~Dの4グループに分かれ、「感じる心つくる喜び豊かな子どもたち-『これがいい!!』児童が自分の感じ方に自信をもって表現する授業づくり-」の主題のもと、本題材のあり方を話し合い、画用紙にまとめながら発表を行った。各グループとも、「花」と「想い」の関係性に焦点を当てた意見が挙げられた。「想い」を固めてから「花」を表すのは、授業としては見通しがもてるものの、児童の実態として難しい場合もある。その上で、試行錯誤できる場が設けられていることやお互いの製作過程が見えることというのが本実践での成果として挙げられた。また、階段という場所から何を描くかを考えさせていく方向性や、「花」以外のテーマとして「未来の私」や「卒業」ではどうかという意見、活動している児童へのフィードバックとして感想を入れられる箱を設置する案など、「これがいい!!」へ導くための様々な題材の展開方法が話し合われた。

(中村)

5. 研究会での講評から

5. 1 特徴的な取り組みの姿

以上の授業実践と協議会でのディスカッションを踏まえ、笠原が授業の取り組みに対するコメントを述べた。まず、本授業の前から校舎内に展示された作品があることに注目した。児童が作品を通して自分たちの思いや表したいイメージを校舎内に形にしていく文化がこの学校に以前からあることは非常に重要な要素である。学校全体が児童の思いを受け止めてくれるような場所であるというメッセージを常に発しているとも言える(図21)。こうした児童の学校への関与は遊び心も感じられ、普段の生活も含めて学校全体への愛着にもつながる。前任者がこうした学校の校舎と共に表現活動を行う取り組みを行ってきた経緯もあると聞いたが、日々、児童を包み込むように日常の環境としてあることが重要である。そうした場所そのものが児童を肯定的に受容し受け止める素地が学校に蓄積されていることは大きい。



図21 階段に以前の活動の作品が展示されている

この作品(図22)はコーナーの三壁面で絵の内容を面によって変えながら描き、壁のスイッチなど空間にあるものも上手く生かして描いている。



図22 三面やスイッチなど環境の特徴を生かして

ある児童は階を表す数字やライトなどがある場所に描いた(図23)。同じ階段でも自然光が比較的に入る場所もあれば、蛍光灯の光が中心の場所もあるなど、場所ごとに光のニュアンスで印象が変わる。児童はそうした場所の持つ感じも感じ取りながら、表そうとするイメージを見出している。



図23 壁の数字やライトと一緒に描く

場所によっては鏡もあり、鏡の奥に手すりや階段が続いているように見えるが、鏡には少し歪んで映ることから、こちら側の見えているものが鏡の向こうの世界では少し雰囲気が異なり、鏡の向こうに不思議なパラレルワールドが広がっているように見え、こちらとあちらが繋がっているようにも見える。薄暗い踊り場でちょうど二輪の花が蛍光灯と鏡を囲む様に描かれ、鏡の向こうの世界へ見る者を誘っている様に見える(図24)。



図24 鏡の向こうの絵と共に二輪の花が見える

5. 2 授業の中で起こっていたこと

5. 2. 1 試行錯誤を通して曖昧な過程を進む

授業者(中村)から、児童はどのように自分たちの「これがいい!!」というイメージや想いを見出していくのか、まだわかったようで曖昧なところがあるという意見が述べられた。中には当初からある程度「自分はこのような想いを花に表したい」ということが明確になって進んでいく児童もいるだろう。そして、そうではない児童もまた、自分が表したい想いと、それを具体化する花のイメージを描く試行錯誤の中で見出していたわけである。登藤・更級(2017)の小学校と中学校での実践研究によれば、教師が想いの実現に向けた技術的指導をするだけでなく、そこに子どもの実感が伴わなければ意味がなく、それを深い学びにつなげていくには「児童・生徒が身体を伴う学習過程の中で、自己の課題を解決していく実感を得させることが、図工・美術科が担う自律性の高まりにつながっていく」(p. 101)とする。だとすれば「これがいい!!」が見出せる造形活動とは、「つくる」と「見る」の相互的な働きを通して、「『みる』視点を増やししながら、自己のイメージと対照との往來をする場面の設定」(p. 92)と「『みる』視点をを用いて表し方の試行を行い、最適な表現に近づく調整をする場面の設定」(p. 92)を環境として盛り込みながら、こうした「つくる」と「見る」ことの往還によって徐々に「これがいい!!」と思える自分なりの意味や価値を見出すことだと言える。それは同時に自己の実感が伴った課題解決過程となっており、つくることによるその実現が再び自己の実感をより確かなものにする。それによって表現が見出され具体化される創造的なスパイラルの発展の度合いに応じて、「これがいい!!」と思えるようになっていくのであろう。こうした試行錯誤の過程を進むことは本授業の一つの重要な過程であり、目的でもあった。こ

うした先の見通せない創造活動をどのように進んでいくのかをいかに経験するか。そして実際にそこで当初は思ってもみなかったイメージの具体化を実際に経験することが重要であった。そのため教師側からは最初にイメージが安易に固定してしまわない様に試行錯誤にゆるやかに招き入れるような、曖昧さを適度に共有しながらゆるやかに授業を進めていくファシリテーションの視点と態度が求められるだろう。

5. 2. 2 個人製作であり共同製作的な時間と空間

本授業は公開製作的活動でもあり、同級生はもちろん下級生や教師も見ている中で表現の追求が進み、一人ひとりが「これがいい!!」と思うものが描けたことで、それが同じ階段やクラスのメンバーとゆるやかに共有され、全体として大きな世界観が立ち上がったように思える。一人ひとりの児童が「これがいい!!」を生み出していったことが、結果的に多くの児童にとっても当初思ってもいなかった「たくさんのこれがいい!!」という共同的イメージの生成に参与し立ち会うことになった経験となったのではないだろうか。

「ともにつくり出すことへの思いをふくませていく授業」において栗原(2004)は、自分らしさの発揮や自分の素直な「もう少しこんなふうにしてみたい」という思いは、仲間とのやりとりから膨らんでいくという。そこでの教師の役割とは、「子どもたちの学びの中からその価値を引き取り子どもたちの学びにかえていくこと」(p. 63)だという。もちろん「これがいい!!」に至る学びの深まりは、仲間に加え教師や環境(場)の力も大きく作用する。中村による実践についての報告からは、近くの児童と絵の内容をつなげてみたり、その後また各自で描いたりする姿なども報告され、他の児童との距離感も様々に感じながら取り組んでいることが垣間見えた。

また、想いを花に託して描こうとすると、描きたい想いとそれが必要とする形や色のイメージがなかなか見えてこない場合もある。しかし、描いていく過程では、先のイメージがまだ見えてこない場合でも、しばらく絵を眺めてみたり、あえて描かずにしばらく絵から距離をとったり、他の児童の取り組みを見てみたり、談笑したり、先述の例のように一緒に描いてはまた各自で製作に戻るなど、行きつ戻りつ進む試行錯誤を許容する時間と空間の環境があった。それが結果的に、じっくりと向き合うことを可能にする授業づくりとなっていたのであろう。一人ひとりが自分の表したい想いをもとに「これがいい!!」を見つけていくが他の児童と共に同時的に展開することで、個人製作でありつ

つも共同製作的な時間と空間が学校全体の中に生み出されていたのではないだろうか。それは一人ひとりの探求的なマインドを刺激する大きな表現の場の力の生成でもあったはずである。

5. 2. 3 表現を通して自己を見つめ伝え合うこと

授業者から聞いた前任者の話では、この授業を自分たちの存在とどのように価値づけるかという点をより深めていくこともできるはずだという意見があったという。6年生ということで学校の中で自分の花をどこにどう描くのか、誰と描くのかといったことは、比喩的に見れば、クラスや他者の中で自分はどうかあるのかを確認し模索することと重なる。そこでどのように自分を見出だそうとするかは、学校という場所での彼らの生のあり様や自己形成の姿と重なる。

児童はもちろん、大人にとっても自分の想いを形や色を通して伝えることはそう簡単ではない。しかし、図工といった表現活動が媒介となることで、直接言えなかったことが表現できたり、共有できるようになる。特にコロナ禍の中では活動の機会や形式、会話など、仲間とのコミュニケーションに様々な制限があるため、こうした表現の機会があることは例年以上に重要ではないだろうか。

普段とは異なる大きな空間の中で身体を大きく使って描くことや、長期間に渡って描くこと、その過程を公開し、個人製作を越えた環境の中で取り組まれたことが表現の可能性を広げている。それは同時に自他の交流を広げ深めることでもある。本授業は、自分を他者や学校という関係性の中で、(再)発見・(再)創造できる契機を内包した題材だと言えるだろう。

(笠原)

6. 考察

本研究では、府教研図工部の研究主題を受けて、「児童を軸とした視点」と「授業を軸とした視点」を個人的な意識としてもちながら、児童が「これがいい!!」と自己決定できるような題材のあり方を考え、実践を行った。本題材においては、児童が表したいもののイメージをもてるようにすることと、試行錯誤しながら描き進められることを重視し、授業を通してそれぞれの児童が自ら考えながら活動する姿を捉えることができた。

児童の取り組みの様子から改めて見えてきたのは、活動の中での試行錯誤と、試行錯誤を通して新たに見出だされる価値についてである。本実践では、児童が

どのような花を表すかを考えたり、材料や用具の性質や特徴に応じた使い方を探ったり、友達と関わったりしながら形に表していく過程を捉えることができた。このように試行錯誤しつつ形が表されていく過程において、活動を展開していく起点となるのは、児童にとっての「これではない」という感覚ではないだろうか。普段の図工の授業でも言えることだが、こうしようと思いついた児童はひとまずそのイメージに向かって活動を始める。教師側からすれば、材料や構造、製作に費やす時間等を考えた時に、イメージ通りに表すことは難しいのではないかと感じるケースも多い。だが、大抵の児童はそこまで想定することはせず、まずは形に表すことを試み、自らによって表された形を前にして「これではない」と感じるようになる。「これではない」という感覚は、思い描いたイメージと実際に表された形とのズレを意味し、このズレを解消するための取り組みが試行錯誤する姿につながるのである。すなわち、「これがいい!!」と感じる活動へと向かわせていくためには、まずは活動のきっかけとなるイメージをもたせ、一度形に表してみることの促しが重要である。そして、児童自身が表した形と向き合う中で試行錯誤していけるように見守り、時には共に考えつつ進めていくことが求められる。

しかし、試行錯誤を重ね、イメージに合わせて形を修正していくということがズレの解消として行われているかと言えばそういうわけでもない。本実践でも見られたように、形に表していく中でイメージ自体が更新され、さらに形へと反映されていくような活動こそが「これがいい!!」と思える状況をつくり出していると言える。日本教育大学協会全国美術部門・特別課題検討委員会(2015)がまとめた「うみだす教科の内容学-図工・美術の授業でおきること-」では、「自己の常識的な思考の枠組みを超える価値を認識することによって、新たなスケールが獲得される」(p. 10)とし、その瞬間を「飛躍」という言葉で位置付けている。つまり、活動の主体となる児童はイメージしたものをそのまま形として置き換えていくのではなく、つくり、つくりかえ、つくる中で、これまで認識していなかった価値を見出だしているのであり、その新たな価値との出会いこそが「これがいい!!」と思える表現活動を実現させていると言えよう。

以上、児童の活動を中心として考察を進めたが、児童が試行錯誤を経て新たな価値に出会う際、教師がどのような視点をもち関わるかということも、結果を左右する一つの重要な要素として考えられる。児童の実態を踏まえてねらいを設定し、指導の方法や展開を工

夫したり、学習環境を整えたりといった授業そのものの組み立てに重点を置く「授業を軸とした視点」は、活動の枠組みを作る上では欠かせない。しかし、教師の設定した目標への到達が目的化してしまえば、ズレが生じたとしても目的に適合しないと判断され、「飛躍」して価値に転換されることもないのである(中村, 2019)。児童が活動の中で新たな価値を受け入れていくためにも、活動する児童と伴走し、活動自体をも組み替えていくような「児童を軸とした視点」を教師がもっていることが重要だと言える。この「児童を軸とした視点」は、一見、「授業を軸とした視点」の枠内に含めて考えることもできそうに思える。しかし、矢野(2006)が「教育の世界では、遊びが結果としてもたらす発達の効果をもって遊びの本質とってしまう」(p. 113)と述べるように、たとえ有用性の原理から脱する自由な行為であるはずの遊びでさえも目的のための手段として回収されてしまう以上、児童の活動における試行錯誤、さらには新たな価値と出会うということはあえて別枠で考える必要がある。「児童を軸とした視点」と「授業を軸とした視点」は、矛盾するように教師の中に存在し、その間で教師自身も試行錯誤しながら児童と関わっていくのである。

7. まとめ

本実践では、児童自身が「これがいい!!」と思えるような活動のあり方を探る上で、児童が表したいもののイメージをもてるようにすることと、試行錯誤しながら描き進められることを重視した授業を行った。そして、児童の活動の様子から、形に表していく過程の中で、児童自身が想像していなかった新たな価値を見出しながら製作を進めていることが明らかになった。このような、「これがいい!!」と児童が感じられるための授業づくりにおいては、まずは形に表すことを促し、そこから繰り広げられる児童の活動を見守りながらも共に考えていくことが求められる。教師は、目標への到達を目的とした「授業を軸とした視点」だけでなく、児童と伴走し、活動自体をも組み替えていくような「児童を軸とした視点」をもって授業に向き合うことが重要なのである。

本実践は、授業における児童の活動に留まらず、そこに関与する教師のあり方について言及した知見とし

て考えることができる。課題としては、教師をも含めた上での授業として捉えていく場合、実践者がいかなる視点からその活動を構想し得るのか、また、授業研究として描きだすことができるのかということが挙げられる。今後、活動の内部に教師を置いた授業提案を蓄積し、実践を通して考察していくことが必要であろう。

(中村)

謝辞

実践に際してご指導ご協力を賜り、準備から実施までご支援いただきました府中市立府中第十小学校、そして貴重な機会を与えていただきご助言を賜りました府中市立小中学校教育研究会図画工作・美術部の皆様に心より御礼申し上げます。

文献

- 栗原正治(2004)「ともにつくり出すことへの思いをふくませていく授業(図画工作科、各提案ダイジェスト特集、第2部 各教科・領域部提案、研究発表会特集「ともにひらく：育てたい力を明確にした世田谷プランの創造)」, 東京学芸大学教育学部附属世田谷小学校教育研究会, p. 63.
- 文部科学省(MEXT)(2017)「小学校学習指導要領(平成29年告示)図画工作編」
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2019/03/18/1387017_008.pdf(最終アクセス日 2021年7月30日)
- 中村翔太郎(2019)「創造に関する一考察」笠原広一, リタ・L・アーウィン編『アートグラフィー：芸術家/研究者/教育者として生きる探求の技法』, ブックウェイ, pp. 291-310.
- 日本教育大学協会全国美術部門・特別課題検討委員会編著(2015)「うみだす教科の内容学-図工・美術の授業でおさること-」, p. 10.
- 更科結希・登藤珠美(2017)「創造活動の価値を見出すことができる児童生徒の育成～表したい想いの実現に向け、試行や再考を繰り返す工夫を通して～」, 北海道教育大学附属釧路小・中学校研究紀要, 4/5年次目研究 図工・美術編, pp. 90-101.
- 矢野智司(2006)『意味が躍動する生とは何か-遊ぶ子どもの人間学-』, 世織書房.